HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	社会教育研究における学習論
Author(s)	内田, 弘; 蔡, 越先; 趙, 文翊; 李, 錦; 八島, 絵美; 祁, 暁航
Citation	社会教育研究, 38, 69-80
Issue Date	2020-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/80491
Type	bulletin (article)
File Information	007-0913-0373-38.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

社会教育研究における学習論

内田　弘・蔡　越先・趙　文翊
李　錦・八島　絵美・祁　暁航

目　次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
1. 学習過程・意識変容に関わる生涯学習理論の検討・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
1-1.「生涯発達－物語としての発達」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
1-2. 経験学習論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
1-3. 状況的学習論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
1-4. 活動理論・拡張的学習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
2. 社会教育研究における学習論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
2-1. 社会教育の固有性と学習論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
2-2. アート概念と日常生活批判・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 73
3. 芸術文化活動の解放性と創造性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
3-1. 対抗価値としての意味を担う・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
3-2. 釜ヶ崎芸術大学の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
3-3. 「新たな主体」と「感性共同体」の創出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
3-4. 「学習共同体」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
4. ココルーム井戸掘り実践の分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
4-1. 社会教育研究における学習論から井戸掘り実践を見る・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
4-2. 小括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79
おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79

はじめに

近年、社会教育研究においてその方法論や社会教育的価値に関する議論が積み重ねられている。日本社会教育学会の年報においては、2016 年発行の『社会教育研究における方法論』や 2019 年発行の『地域づくりと社会教育的価値の創造』などが挙げられる。

このような議論の中で宮崎は地域概念に焦点を当て、以下のように論じる。「近代社会において地

域が意識されるのは、暮らしに関する課題意識の集団的生成」が生じ「社会的課題の主体的・集団的解決が試みられる場合で」あり、「社会教育の文脈で地域を問うのは、このような経験が有する学習論的意味に着目するからに他ならない。しかし、そこで直ちに問われるのは、この経験の意味を明らかにし得る学習論であり、そのような学習論に立脚する社会教育（学）の概念」[1] であると。

上記のように社会教育の概念を明らかにしようとするとき、その実践に内在する学習に着目し活動の意味を検討することが求められていると言えよう。そこで本稿は社会教育研究における学習論を検討することを目的とし、以下では生涯学習の理論を概観した上で社会教育研究における学習論をめぐってどのような議論がなされているのかを確認する。その上で、実践分析を行い、その活動の学習論的な意味を明らかにすることを試みる。

１．学習過程・意識変容に関わる生涯学習理論の検討

本節では、学習過程と意識変容に関わる生涯学習理論として物語としての生涯発達理論、経験学習論、状況的学習論と活動理論・拡張的学習を概観する。

その際、赤尾勝己編『生涯学習理論を学ぶ人のために　欧米の成人教育理論　生涯学習の理論と方法』[2] を文献とする。その中では、成人の学習にとっては知識を覚えるというよりも意識が変わるということの方が影響が大きいこと、省察や自分の認識枠組を変える仕組みについて述べられている。

1-1.「生涯発達―物語としての発達」という視点

従来の発達研究は青年期を完態と見做し、人間は衰退していくということである。人間は生まれてから絶えず発達していく存在である。そのことと生涯にわたる学習がどのような関わり合いを持っているだろうか。年齢によって制定された発達課題論が、どのような批判を受けながら、どのように乗り越えられるのかについて検討した。

成人はすでに経験を解釈するための枠組みを持っており、それを用いて現実を意味付け理解していると考えたメジローは、その枠組みを「意味パースペクティブ meaning perspective」と名づけた。意味パースペクティブは「その内部で新たな経験が過去の経験に同化される心理・文化的想定の構造であり、世界・他者・自分について理解するためのいわば個人的パラダイム」である。

1-2. 経験学習―D・A・コルブの理論をめぐって

コルブは、経験学習論を「具体的経験が変容された結果、知識が創出されるプロセス」、すなわち

[1] 宮崎隆志「暮らしの思想の生成論理―地域社会教育の学習論―」日本社会教育学会編『地域づくりと社会教育的価値の創造』東洋館出版社、2019、p.195。
[2] 赤尾勝己編『生涯学習理論を学ぶ人のために　欧米の成人教育理論 生涯学習の理論と方法』世界思想社、2004。

「経験に基盤を置く連続的変換的なプロセス」と定義し、経験学習にとって重要なのはプロセスであると主張する。彼は、学習には「具体的経験」、「反省的観察」、「抽象的概念化」、「能動的実験」という大きく四つの要素が必要であり、それをサイクルとして辿っていくことにより、知識の獲得が可能であることを主張する。

コルブの経験学習論は、人間は経験からどのように学んでいるのか、また、そこで認識がどのように変わっているのか、そのメカニズムを解明する学習論である。変容的学習論とも関連がある。

1-3. 状況に埋め込まれた学習

「状況に埋め込まれた学習」において、実際の労働や活動の場に参加して、次第に実践共同体に中心参加していく過程で学ぶという状況学習理論を論じた。レイブとウェンガーは学習を特定のタイプの社会的参加という状況に置く。学習はどのような認知プロセスと概念構造が含まれるかを疑問にするかわりに、どのような社会的な関わり合いが学習の発生する文脈を提供するのかを新しい設問にすることになる。

状況的学習論は、学習を個の作業や表象の操作に還元する理論枠組みを問い直し、学習の過程には状況（situation）が必要で不可欠の役割を果たしていることを指摘した。学習は社会的実践の世界と離れてはいけない活動であるということを説明する。

1-4. 活動理論・拡張的学習・発達的ワークリサーチ

「活動理論・拡張的学習・発達的ワークリサーチ」ではエンゲストロームの理論を代表とする活動理論・拡張的学習をまとめた。「活動理論」というのは、人間の社会的実践を「活動システム」のモデルを用いて分析し、その社会的・文化的な文脈を捉え、活動システムの歴史的発達を理解しようとする概念的な枠組みである。

また、活動理論は、日常生活など様々な社会的実践の現場において、実践者たちが自分の未来の革新的な実践を自分自身でデザインして創造していくような、新たな実践パターンの集団的創造を促進・支援・介入する方法論である。文化的道具に媒介された集団的活動を取り上げ、そのことによって個人主体と文化・歴史・社会の構造との裂け目に橋を架けようとして、組織の変革、社会の変革をもたらすというラディカルな志向性を有している。

今回、社会教育研究における学習論とはどのようなことなのか確認した上で、実践をどのように捉えることができるのか、ココルームの実践を事例に検討していく。

２．社会教育研究における学習論

2-1. 社会教育の固有性と学習論

以上のように、いくつかの生涯学習理論について検討を行ってきた。それぞれの理論は、ある局面における学習の構造化や諸個人の変容過程を把握する際に有効な手段となり得るであろう。しかし、個人と社会の変容を統一的に把握しながら、そこで展開される実践に内在する学習過程を明らかにし理論化しようとしたとき限界があるように思われる。

そこで、社会教育研究（学）として学習過程を把握するとは如何なることなのか検討を行っていきたいと思う。その際、日本社会教育学会編『地域づくりと社会教育的価値の創造』[3]（以下、年報）を参照しながら行うこととする。

まず、社会教育実践の課題について確認しておきたい。高橋は『年報』において以下のように論じている。「社会教育の固有の課題は、『地域内経済循環』をつくったり、FECの関係を確立することではない」と述べた上で、「大切なことは、学びをとおして人々の関係を形成することにある。…社会的に排除されている人たち、脆弱な人たち、マイノリティの人たちの声をどのように反映させるのか。…つまり、『包容的』あるいは『包摂的』な地域をつくることが大切なのである」と。

さらに、宮崎の論考を引きながら、社会教育における分析単位は「『諸個人・暮らし・地域』であり、学習主体の存在論的基盤である地域において展開する、人々の暮らしをめぐる困難、暮らしに関わる諸活動における矛盾の解決として展開されざるをえない住民の活動システムが出発点になっている。そこにインフォーマルな学習が生まれ、やがて組織的な、つまり、ノンフォーマルな学びが組織される。この展開過程を究明することが社会教育研究の課題になる」と論じている。

次に、上述したような課題に応えうる社会教育研究における学習論とはなにかについて『年報』における宮崎の論考に依拠しながら検討してみたい。まず宮崎は社会教育について以下のように把握する。「地域社会教育は、生活を創る生活のリアリティを、諸個人の協働によってコミュニティ・地域を創ることに見出し、そこに内在する矛盾を解決することによって、人間形成作用を統御する実践」だと述べた上で、「地域社会教育は、より複雑になった個人と社会の関係の総体を把握する可能性を切り開き、民衆が形成作用を統御するためのモデル（新しい世界）を形成する。この学習経験を対象化することによって、現代社会の人間形成力を人々が統御することを見通した社会教育の理論が生成する」と。そして「このような地域社会教育の学習過程を一貫した論理で把握するための出発点、すなわち最小分析単位は、〈諸個人の協働によって構成されるコミュニティ〉という循環性を含んだ過程」であると論じている。

このように分析単位を措定したあと、それを展開させるために日常的実践と日常意識の再構成に焦点を当て議論を展開している。「地域社会教育に求められているのは、日常生活を集団的に再構成し、外部世界を維持する概念装置としての世界観を創造するような創造的学習」であり、「とりわけ焦点になるのは、世界を維持する概念装置を再創造することによる自由度の向上である。そのためには、生活

[3] 日本社会教育学会編『地域づくりと社会教育的価値の創造』東洋館出版社、2019。

創造が愉しみになるような内面の自由（精神的自由）も前提になる」[4] としている。そして最後に、「地域社会教育において実現すべき価値は、日常生活の桎梏となっていた従来の世界観からの解放としての自由を含めて、自己形成の基盤を協働的に創造する自由度を高めることにある」と論じている。

2-2. アート概念と日常生活批判

ではこのように社会教育の学習論を把握したとき、そこで展開される具体的な実践とはどのようなものであろうか。さらに言えば、従来の世界観からの解放を含めた自己形成の基盤の協働的創造とは如何なるものなのか。宮崎はその一つとして「アートによる日常生活批判の可能性」を論じている[5]。そこで次にこの論考を参考にしながら、日常生活を集団的に再構成し、世界を維持する概念装置を再創造する可能性について考えてみたい。

まずアートの意義について、「アートが日常生活の相対的自立性をもたらす条件になっていると主張する」セルトーを参照しながら、「日常性から切り離された地平に成立する自律的芸術としてではなく、日常生活に埋め込まれた活動として」アート概念を把握している。

また、ここでの日常生活は二重性を持つものだという。すなわち、「システムに包摂された側面と、システムを相対化し独自の意味付与を行うことによって成り立つ側面を区分」すべきと主張する。そしてこの点に関して、自己概念の二重性との関連を以下のように述べる。「他者関係は、一方では商品交換関係を現象形態にする社会システムとして展開し、他方では身体性を伴うヴァナキュラー（内生的）（イリイチ, 1982）な関係として日々再生産されてもいる」と。前者はシステムからの要請により「見られる自己」とその背後の自己を「引き裂くまでに至るが（レイン, 1982）、それでもヴァナキュラーな関係を手段化することにより、仮面をつけた自己を演じ続けることができている」のだという。

これについて、「ルフェーブルは『大道芝居の舞台と同様、日常生活においても人間たちは、ほとんどいつでも幻惑者として振る舞っている』のであり、『この演技には自分が賭けられている』という」。そして、「そうであるがゆえに、逆に『芝居は現実の観客のために人生を要約し、凝縮し、演出することができる』（ルフェーブル, 1978, p.64）のであり、アートの解放機能も日常生活者の二重性の意識化と解読として提起することが可能になる」のだと主張する。

以上のようにアート概念と日常生活を把握した上で、「日常生活の二重性の批判的意識化につながるアートはどのような特質を備える」のか、釜ヶ崎のココルームの活動を事例に検討し、以下の 2 点を指摘する。「第一に、日常生活の演技（表現）は、それが従来どおりに遂行できなくなる限界状況において同じ形式をもちつつも内容を転換させる」という。そしてそれを「日常的演技の特殊形態」である「限界的演技（表現）」と呼ぶ。

「第二に、自律的なアートとしての演技は限界的演技を内容とする時に、日常生活の演技との緊張

[4] 宮崎は、「この文脈でアニマシオンを教育的価値として位置付けることも可能であろう」としている。
[5] 石黒広昭編『街に出る劇場−社会的包摂活動としての演劇と教育』新曜社、2018。

を創り出すことができるようになる」という。すなわち、「日常的演技と限界的演技は、アートとしての演技を媒介項にして対照的な両極の位置に置かれる」ことになる。それは限界的演技が「『生きる』という根源的次元からの演技（＝ブリコラージュ）であることによって、日常的な演技が有限であることを照射するから」であり、「日常生活の批判的意識化につながるアートとしての演技は、限界的演技を模倣する演技である」のだという。

以上の検討を踏まえ、次節では芸術文化活動の解放性と創造性について検討してみたい。

３．芸術文化活動の解放性と創造性

3-1.　「対抗価値としての意味を担う」

社会教育研究においては、アートを「自律的なアート」のカテゴリーの中で、芸術文化活動として議論してきている。

北田（1986）は、「対抗価値としての意味を担う」芸術文化活動は、「社会のあり方や自らの生き方に対する批判や疑念」を生じさせ、「なんらかの意味で価値転換を迫るものである」と論じた。

「対抗価値としての意味」を具体的にいえば、アートは相対化する視座を提供することによって、マクロレベルで社会システムの「支配的な価値に」対抗しながら、マイクロレベルで人々の「日常性を脅かす力」にもなる。対抗する一方で、芸術文化活動は「新たな主体と、そういう主体相互の関係の創出」に寄与し、「感性の共同体」を創り出す。さらに、それを「地域社会という広い場に移して」、「地域住民の自治能力の形成に結び付けようと」考えてみれば、「地域に価値転換の動きが興りその波紋が拡がっていくということ――地域の変革ということはそれを措いてほかにない」[6]。

この観点では、芸術文化活動が促す「自己変革」を「自己と他者との関係が変わる」ことと一緒に捉え、そこから「地域変革」に至るプロセスにアートの媒介機能が位置付けられる。

アートがどのように機能して「地域の変革」へつながっていくのか、という問題意識を持ちながら、北田が提起した「自己変革、自己と他者との関係変容、地域変革」というプロセスに立ち返り、釜芸の実践を分析することから、アートがどのような価値を追求するのかを再検討してみたい。

3-2.　釜ヶ崎芸術大学の概要

釜ヶ崎芸術大学（以下、釜芸と略称）は NPO 法人「こえとことばとこころの部屋」（略称・ココルーム、代表・上田假奈代）が日本の代表的な寄せ場の一つである釜ヶ崎で展開している取り組みである。

ココルームが釜ヶ崎に拠点を移した 2008 年の当初、「失業、野宿、そして高齢化で生活保護受給者

[6] 北田耕也『大衆文化を超えて―民衆文化の創造と社会教育』国土社、1986、pp.139-202。

の急増、孤住の高齢者の人生のしまい方」など、「釜ヶ崎の課題は複層化していた」。にもかかわらず、そこで「段ボールを積んだリヤカーのおじさんがハーモニカを吹きながら角を曲がっていくのを目撃する。自作俳句を綴った紙を貼る野宿小屋を発見する。そんな一つ一つを目にして、釜ヶ崎に生きる人たちの素朴な表現、声にならない声をもっと聴きたいと思うようになる。」と上田さんはこのように記述した。釜ヶ崎に生きる人たちが「ひとりひとり表現する機会と場をつくることを目的としよう」とするココルームは、「即興の劇場のようであった」 。

しかし、ココルームは地域に開きつづけていると、「持ち込まれる相談や問題」にも悩み始めた。2011 年、「悩んだあげく、…専門家を講師に招き」、「表現のワークショップ講座を月一回九ヶ月間実施した」。

アルコール依存症のおじさんが全回参加し、最後に「酒はくすり（抗酒薬）でやめるんやない。人生の楽しみでやめるんや。」さらに、「一ヶ月一回では来月生きてるかどうかわからん」と呟いた。

そうした経緯で、「おじさんの生活のリズムになるような企画」として、「釜ヶ崎芸術大学」が 2012 年に開校した[7] 。

「学びあいたい人がいれば、そこが大学」という発想から、地域のさまざまな施設を会場に詩の会、俳句会、及びダンス、書道、天文学、哲学など、年間約 100 講座を開催する。近隣の高校や中学校への出張講座、大阪大学との協働講座があり、国内外の展覧会にも出かける[8] 。

「釜のおじさんたちの高齢化は加速度を増し、おじさんの参加は激減する」[9] という現実に立ち向かい、釜芸は蓄積した経験を生かし、釜ヶ崎における多層的な地域活動の間の境界線を越える取り組みを始めた。

二〇一三年からは、あいりんの六十五歳以上の生活保護受給者の社会的つながりづくり事業（主催：西成区）連合体の一員となり、釜のおじさん・おばさん対象に年間九十回を超える表現プログラムを受け持つ。釜芸に似ているが枠組みは異なる。

アートを通じてホームレスの問題に取り組む団体の国際的なネットワーク「With One Voice」による「日本におけるアート＆ホームレスの実情に関する報告書」（2017）の中に、「（日本での）表現方法は他の国と異なるが、感情は全く同じだ。…人の健康と幸福に貢献し、孤立から繋がりへの橋を築く存在である。」と釜芸の活動を高く評価した。ここでいう独特な表現方法は、詩の作り方としての「こころのたね」（「こたね」と略称）や合作俳句などが挙げられる。2018 年に、在校生の協働作品「釜ヶ崎妖怪かるたーゆるすまち、ゆるされるまちー」が作成された。2019 年に、「大阪の真ん中に、井戸を掘る!」活動が半年ほど続けていた。

---

[7] アート NPO 法人ココルーム『釜ヶ崎芸術大学ドキュメントブック　真剣なことば』、2018、p.8。
[8] 釜ヶ崎芸術大学 2019 春夏のちらしより。
[9] 同上、p.9。

3-3. 「新たな主体」と「感性共同体」の創出

「表現は表現によって否定され、常に否定をくぐって再生しなければならない。この終ることのない自己表現と自己否定の連鎖を通して、そこに表現者としての主体が生れ、鍛えられて育つ。」こういう内面的な自己形成過程がアート表現の形をとって外在化され、他者に受け止められるならば、「個別性・特殊性」から出発して表現された自己の存在は他者に認められ、「普遍性」の意味を獲得する[10]。

しかし、釜ヶ崎で積み重ねられてきた限界状況は、「文化による人間疎外」の結果として、「歴史的に重層化している」。「歴史意識というタテ軸」と「自分自身を込めた状況認識」「というヨコ軸の接点に自己を見出す構造的な自己把握」がなさない限り、主体の確立は成り立ちがたい[11]。

釜ヶ崎に生きる人々は、釜芸で個人的な経験をこの地域の歴史に織り込んで表現し、それを共有することを通して、自己の普遍性の意味が承認されるのみならず、人々のあいだに「共存共生の感覚」が生じ、共感を大切にする「感性の共同体」がアートの媒介によって結ばれる[12]。それをもとに、新しい「自己表現と自己否定の連鎖」が促され、新たな主体としての自己が集団的に創造されつつある。

この主体形成のサイクルを循環させる基盤となる「感性の共同体」は、みんなで一緒に作品を創ることに続き、出来あがった作品をみんなで一緒に楽しむことによって協働で構築するのである。「感性の共同体」は「人間的な連帯の回復」を支え、「人間性の深まりと人間への信頼の母体となる」[13]。

3-4. 「学習共同体」

「素朴な表現活動が、芸術の創造や鑑賞を通して感情体験や美的価値を共有する活動へ発展転回をとげていく共同のいとなみである。」[14] このような実践は、アートが媒介する「感性の共同体」を地域へ拡張し、ほかの地域団体と「相互の対等な協力関係」を結び付け、「現実を理想に向けて超克してゆく」「学習共同体」[15] の形成を前提にする。

アートの力は「美的価値、…と真理的価値および倫理的価値」を追求することで「生の新しい可能性をひらく」[16]。

そこに「生の新しい可能性」を見出してゆくことは、アートの媒介で新しい普遍的な価値を創り出し、それを人間的な「連帯や共同の紐帯」にして、「自然と人間、人間たがいが支えあって」「より善く生きたいという願望」を実現するのであろう[17]。

「美的価値」と「真理的価値」、および「倫理的価値」、この三者の関連にかかわる「理論的究明は、

---

[10]北田耕也『大衆文化を超えて―民衆文化の創造と社会教育』国土社、1986、p.177。
[11] 同上、p.145。
[12] 同上、p.163、p.203。
[13] 同上、p.172、p.190。
[14] 同上、p.163。
[15] 同上、p.189。
[16] 同上、pp.190－192、p.169。
[17] 同上、pp.132－133、p.206。

…社会教育の問題として追求する必要がある」[18] と北田が指摘した。

４．ココルーム井戸掘り実践の分析

前節ではココルームの実践に即して芸術文化活動の解放性と創造性について検討を行ってきた。本節では、ココルームの実践の一つである協働で井戸堀りを行う取り組みに焦点を当て、その実践が持つ意味について検討したい。

4-1. 社会教育研究における学習論から井戸掘り実践を見る

ココルームにおける井戸掘り実践を学習論の視点から見るとどのような意味があるのだろうか。ここでは、井戸掘り実践についてのインタビュー記事[19] を参照しながら検討してみたい。

（1）

「掘る人を井戸の底に下ろし、掘った土を汲み上げる」という単純な作業ですが、慎重な連携プレーが必要。その日出会ったばかりの人同士でも自然と連帯感が生まれます。

井戸に入って掘るのは一人だけど、上にはロープを引っ張る人、バケツを受け取る人、バケツの土を捨てに行く人など、5 人ぐらい頑張ってくれているのね。掘り終えて引っ張り上げてもらうときには、みんなが「おかえりー！」って声をかけてくれる。それがとてもいい感じなの。

―井戸掘りには慎重な連携プレーが必要であり、その結果自然と連帯感が生まれてくる。すなわち、井戸掘りの協働によって新しいつながりができ、共感に基づくコミュニティが形成され、コミュニティが豊かになっていっているのではないだろうか。

(2)

「掘る」というプリミティブな行為は、人間の本能を掻き立てるものなのでしょうか。最初は怖がっていた小さな子さえ、お父さんと一緒に井戸の底へ。ひとしきり小さなスコップで井戸を掘ると、なかなかの“ドヤ顔”で地上に上がってきました！

「井戸掘り」の講座のときは一番生き生きした顔を見せてくれるのね。

「昔、分譲住宅のタンクをいれるために掘ってた」というおじさんは、押入れから昔使っていた道具を出してきてくれて。井戸を掘っているうちに就労意欲が湧いちゃって、「先生、悪いけどお金儲かるほうがいいからアルバイト行くわ」って来てくれなくなっちゃった（笑）

---

[18] 北田耕也『大衆文化を超えて―民衆文化の創造と社会教育』国土社、1986、p.192。

[19]「自分のいのちをつなぐ水、人に任せっきりでいいのかな？」大阪・釜ヶ崎にであいと表現の場をつくる「ココルーム」が井戸を掘り、その方法を共有する理由とは？https://greenz.jp/2019/06/27/cocoroom_ido/

―小さな子どもが“ドヤ顔”で地上に上がってくる場面や就労意欲が湧いてきたおじさんなど井戸掘りの実践を通して関わる様々な人々が豊かになっていく姿が読み取れ、これはこの実践がアニマシオン機能を有していると見ることもできるのではないだろう。

(3)

相変わらず「怖いまち、行ったらあかん」と思われているままで、釜ヶ崎のおじさんたちの存在がなかったことにされ、街の記憶が消えてしまっては、わたしたちがここにいる意味はなくて。

この国の地面を掘ってきたおじさんたちと井戸を掘り、その経験とともにおじさんたちのことを記録して伝えたい

―街の記憶が消えてしまっていくことに対して、井戸掘りを通してそこに生きてきた人の姿や経験を残していくことにもつながっている。具体的に言えば、井戸掘りの協働的な実践によって、おじさんたちの記憶と経験が共有可能な場の資源として再構成され、地域まで拡大し、おじさんたちの記憶が釜ヶ崎の記憶をつないでいくと考えられる。

(4)

ココルームの活動は、アートやソーシャル、まちづくり、文化政策に興味を持つ人には届いているかもしれないけれど、井戸を掘るということから、それ以外の人とつながれるのもいいところだなと思っています。何しろ、掘るのはすごく面白いから！ おじさんたちも、休憩時間に「今までどんな仕事をしてきたか」を話してくれて、参加者もわたしも興味津々に聞いてるわ。

―釜ヶ崎芸術大学などの取り組みではアート・文化活動やまちづくりの人たちが中心的であったとも言えるが、井戸掘りの実践は異質的な人との出会いと対話ができる場づくりと見ることができるのではないだろうか。

(5)

ココルームが井戸を掘り始めたときに、「まさか、大阪の真ん中で井戸ができるのかな」と半信半疑だった人も、この井戸を見たら「本当にできている！」とびっくりすると思います。そして、「自分たちで井戸を掘れるんだ！」と思えたことに、ちょっと自分の枠がはずれたような自由さを味わうのではないかと思うのです。

きっとそれぞれの営みのなかで、引っかかっていること、管理されているって思うこと、固定観念に縛られているなって思うことに対して、「ちゃうやん！」って言っていいということだと思う。

大阪の真ん中で井戸を掘ることを通してココルームが伝えたいのは、井戸掘りのノウハウだけでなく、自分たちの生活や価値観をつくりなおし、自分たちを取り戻す感覚なのだと思います。

―「自分の枠がはずれた」という表現や固定概念に対して疑問を持ったり、自身の生活や価値観を

捉え直し取り戻すといったことが見られる。このことは、井戸掘りの実践を通して関わる人ひとりひとりが自己や社会について省察をしていく様子や、従来のものの見方と枠を解放・拡張し、個人の自由度を高めていく過程として見ることができるのではないだろうか。

4-2. 小括

上記のように井戸掘り実践を捉えた上で、この実践についてまとめていきたい。まずこの実践は単に井戸を掘るという作業にとどまらず、この地域で暮らしてきた様々な人々および地域の経験や記憶を集積する機能を有していると考えられる。

そして、その蓄積された経験や記憶を多様な人々との関わりの中で再構成し、それがその場にいる人たちで共有可能な学習の資源として構成されていると見ることができるのではないだろうか。今まで学習の資源は個人の中にあると考えられることが多かったであろう。しかし、このように実践を捉えることで学習の資源が個人ではなく地域やコミュニティの中に存在するという見方が可能となるのではないだろうか。

おわりに

ここまで社会教育研究における学習論を確認した上で、実践分析を通して活動に内在する学習論的意味について検討してきた。

実践分析を通して得られた知見として、個人が持つ学習資源と地域・コミュニティにある学習の資源とが相互に関連し合うことで、自身の生活や価値観の捉え直しや従来のものの見方と枠の拡張、そして個人の自由度が高まっていくということに繋がる可能性があることが明らかになったであろう。また、このようにコミュニティが豊かになっていくことで、そこに関わる人々も豊かになっていく過程をコミュニティ・エンパワメントの過程としてみることもできるのではないだろうか。

この点に関して、原口剛はココルームの実践に関して、「土地を共有することで、そして土地の物語を媒介とすることで、隣人とも、まだ見知らぬ他者とも、何度でも出会いなおすことができる」。「土地に刻み込まれた数々の日常生活から成る物語は、翻って私たちの日々の生活こそ価値や信念を生み出す原泉であることを、絶えず想起させるのである」[20] と述べている。また、田中均は「地域の記憶と地域に蓄積された知恵を次の世代へ、さらに釜ヶ崎の外へも継承していくことも重要になってきている」[21] とココルームの現状を捉えている。

---

[20] 原口剛「過程としての、場所の力」岩渕拓郎、原口剛、上田假奈代編著『こころのたねとして～記憶と社会をつなぐアートプロジェクト～』ココルーム文庫、2009（第 2 版）、p.204。

[21] 田中均「『カマハン』のあった 4 ヶ月とそれから」上田假奈代、冠野文、社納葉子編集『真剣なことば Earnest Words』特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）、2019、pp.74～75。

これらの指摘は、今回明らかにしてきた暮らしの基盤となる地域に蓄積した知恵が、そこに関わる人々やコミュニティを豊かにしていくための学習資源となっているという見方とも相互に関連するものであろう。

ただ残された課題もある。この実践を通して地域の経験や記憶がどのように再構成されているのか、その過程の具体的な内実はまだ明らかになっておらず今後検討する必要があるであろう。また、この実践の過程を社会教育実践として見ていく際、コミュニティ形成過程自体を分析・評価していくことになるであろう。その際にコミュニティ・エンパワメントの視点が重要となっていくがその具体的な分析枠組みの設定までは至っておらず今後検討が必要であろう。